



広報

京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻
 京都大学医学部人間健康科学科



目次

○リーディング大学院の紹介	検査技術科学コース 特定助教 浪田 健…10
リハビリテーション科学コース 教授 黒木 裕士… 2	○第 25 回（2012 年）健康科学市民公開講座…11
○退任等挨拶	○2012 年度オープンキャンパス…11
元看護科学コース 教授 菅 佐和子… 4	○人間健康科学系専攻から
元検査技術科学コース 教授 中泉 明彦… 5	博士が 5 名誕生しました…13
元看護科学コース 准教授 谷口 初美… 6	○人間健康科学系専攻・人間健康科学科
元リハビリテーション科学コース 講師 酒井 浩… 7	平成 25 年度入学試験及び
元看護科学コース 助手 田中 真琴… 7	平成 24 年度修了・卒業者数…17
○新任等挨拶	○平成 24 年度卒業生の進路調査結果…19
検査技術科学コース 教授 藤井 康友… 8	○人事異動…20
看護科学コース 講師 内海 桃絵… 8	○日 誌…21
リハビリテーション科学コース 助教 松島 佳苗… 9	○あとがき…22

「充実した健康長寿社会を築く 総合医療開発リーダー育成プログラム」の紹介

医学研究科人間健康科学系専攻教務教育委員長（リハビリテーション科学コース 教授） 黒木 裕士

京都大学リーディング大学院「充実した健康長寿社会を築く総合医療開発リーダー育成プログラム」（以下、本プログラム）は京都大学大学院の医学研究科・工学研究科・薬学研究科のいずれかの修士課程（博士前期課程）に入学した新入生を対象とする、博士課程（博士後期課程）修了までの5年間一貫性人材育成プログラムです。人間健康科学系専攻の学生も対象となります。このプログラムに採用されると毎月一定額の、日本学術振興会特別研究員に与えられる研究奨励金に匹敵する奨励金（返還不要）を受給しながら研究に専念することができます。

超高齢社会をむかえ、健康長寿とQOL向上、高齢者の社会参画、そして医療費の抑制という喫緊の解決すべき課題に直面した我が国において、本プログラムは、従来にない全く新しい総合医療システム、つまり医療・福祉・在宅ケアの統合、個人の生活全体を考慮した支援システム、および望ましい生活習慣による疾病・障害の予防システムを実現できる人材を育成します。具体的には、従来の医工連携、人間健康科学との連携の枠組みを超えて、医療現場のニーズに立脚した総合医療システムを開発する医工学人材とこれを統率するリーダーを育成・輩出します。

医学研究科の福山秀直教授をプロジェクトリーダーとする本プログラムでは、工学研究科や医学研究科人間健康科学系専攻に入学した大学院生に対し、医学研究科医学専攻の卒業生に匹敵する医学・医療知識を教育し、「真に医学・医療がわかる」医学・工学・人間健康科学にわたる学際的人材を育成します。医療支援現場の実習や医療倫理学を通じて、利用者にとって負担の少ない「高齢者に優しい」機器・システムを開発するセンスを養います。さらに、単なる医工学知識のみならず医療経済学・許認可制度にも通曉し、機器・システムの産業化・市場の予測をできる能力を身に付けるほか、国際標準化の感性や、英語による卓越したコミュニケーション能力を備え、国際機関などでも活躍できる人材を育成します。

医工連携ということが重要であることは論を待たないところですが、医工連携の言葉そのものの意味するところは、医学研究者と工学研究者が協力し合い、新しい医療機器なり、医療方法を開発するということにあり、すでにある研究成果や問題点を協力して解決していくということでした。つまり、医学研究者は医学的基盤、工学研究者は工学的基盤、人間健康科学系研究者は人間健康科学的基盤という専門領域を持ち、それをもとに新しい発想をするという色彩がありました。しかし本プログラムでは、このような研究領域を超えた研究を行うだけではなく、たとえば人間健康科学系専攻に入学した大学院生に対し、「医学研究環境の中で人間健康科学を深く学ぶ」というさらに一步踏み込んだ発想で、人間健康科学系の大学院生の研究の場を医学研究環境の中におき、医学研究そのものを行うのではなく、人間健康科学的見地から見て新しく医学へ貢献するところがないかを研究する目的意識を持ち、人間健康科学の基礎研究のトレーニングを受けつつ、医学・工学の基礎から臨床、介護までを学び、医学・工学・人間健康科学の垣根を越えた新しい研究領域を開拓します。

このような新しい考え方をもとに、今回のプロジェクトがスタートし、人間健康科学系専攻も含め医学研究科が中心となって、工学研究科や再生医科学研究所のスタッフが協力した体制を作り、上述の目的を達成するカリキュラムが工夫されています。これまでの大学院と異なりリーディング大学院では社会との接点を重視した人材育成を目的としているので、広く英語による討論・ディベートによる自分の意思の発信能力の養成と、社会を医療の観点から俯瞰する医療経済学など、医工連携だけにとどまらない広い世界的視野に立った人材育成を目指している点で、これからの高齢社会へ資する人材の育成に役立ちます。

本プログラムで養成される総合医療開発リーダーの人物像としては、たとえば、（1）先進医療分野の革新的人物として、医学・医療・人間健康科学の広範な知識、高度な工学技術を駆使し、高齢者に優しい医療支援機器システムの立案ができる人材、（2）高齢者特有のニーズを理解し、自立した生活や社会参加の向上方法を創案できる人材、（3）高齢化社会の医療経済問題を深く理解し、プロアクティブに対応できる人材、（4）世界標準を目指す医療産業を創出できる人材等々、これまで育成する必要があると認識されながらも、我が国ではそれに特化して育成するところま

では踏み込んでいなかった専門分野を自ら創り出し、開拓してゆくことを描いています（図を参照ください）。

本プログラムの授業カリキュラムの特色としては、（１）人体解剖、生理、組織・病理の講義・実習を通じ、理工薬学系出身者が医学部医学科卒業生に匹敵する基礎医学と生体知識を習得すること、（２）病院・高齢者施設、公的機関、国際機関などでの特別研修を通じ、医療・介護支援などの現場のニーズを理解できるように構成されていること、（３）もちろん、これまで京都大学が培った専門性の高い医工学の知識、技術を体得し、社会ニーズに基づいた研究開発を進める能力を培うこと、（４）経済、医療倫理、知的財産&国際標準化など、社会における医療ルールを理解できるよう作られていること、（５）企業・国内外研究機関での実践的学修とインターンシップを通じ、修了後すみやかに産官学界で活躍できる、リーダー的素養を身につけることが可能であること、等々が挙げられます。

この５年一貫課程を修了し、一定の成果を挙げた学生に対しては博士（医科学・人間健康科学・工学・薬科学）の学位が授与されるとともに、リーディング大学院「充実した健康長寿社会を築く総合医療開発リーダー育成プログラム」の修了証が授与されます。

人間健康科学系専攻に入学した大学院生も対象とするプログラムですので、学生はぜひ奮って応募してください。また指導教員は学生に対して応募を勧めていただくようお願いいたします。詳細につきましてはホームページ <http://www.lims.kyoto-u.ac.jp/> をご覧ください。



退職のご挨拶

菅 佐和子

本年3月31日をもちまして定年退職いたしました。平成3年4月、本専攻の前身である京都大学医療技術短期大学部に一般教育所属の助教授（心理学）として着任してから、22年の年月が流れました。当時は、東に大文字山、西に鴨川を望むキャンパスの周辺はまだ現在のように整備されておらず、鬱蒼とした精神科の森が佇み、あちこちに草叢が残り、実験動物の犬の姿と鳴き声が聞こえる、野趣の残る環境でした。

その後、京大病院は、東構内も西構内も次々と整備が進み、歴史を感じさせる古い建物が消え、新しい立派な建物が次々と建てられていきました。校舎も、正面から見れば当時の面影のままですが、西側、東側、北側へ回ると、増改築が重ねられ、ずいぶん様子が変わっています。現在の教員棟は、昔は看護師寮で、校舎とはつながっていませんでした。また、現在の杉浦ホール場所は、以前は、シンボルツリーである背の高いユリノキが何本もそびえ立つ中庭でした。そこを学生の憩いの場所にするため、草叢が整備されて、小道ができ、大きな日よけ傘の下にベンチが置かれたのも懐かしい思い出です。

ある日、私が、5階の大講義室で授業を行っているとき、突然、中庭でユリノキを切り倒す工事が始まりました。そして、あっという間に、校舎より丈の高いすべての木が伐り倒され、運び出されていきました。事前にそのような話を聞いていなかっただけに、これは、発展に伴う「犠牲」のような気がして、いつまでも臉に残っています。

私が着任したころの医療技術短期大学部の最大の課題は、「四年制化」ということでした。当時、国立の医療技術短期大学部は次々に四年制に転換しつつあり、どういうわけか、京大は後々に回されていたのです。歴代の首脳部の先生方、事務管理職の方々のご苦勞は傍で見ていても大変なものでした。周到的な準備を重ねてもなかなか認可が下りず、いよいよ最後になって、ようやく、待ちに待った認可が下りたのです。そして、「人間のこころと身体の健康づくりのために、自然科学と人文社会科学の垣根を取り払い、統合的な立場から探求する」という「健康科学」を旗印にした新しい学科が誕生することになりました。

「四年制化」が決定して、平成16年度から新入学生を迎えることになってからは、一挙に激動の時代が始まりました。新しい教員を多数お迎えすることになり、私たち一般教育（総合教育）所属の教員7名も、看護学専攻、検査技術学専攻、理学療法学専攻、作業療法学専攻のどこかに分属することになったのです。私は、思いがけず看護学専攻に配属され、はじめて卒業論文の指導をすることになりました。その後、修士課程、博士課程が開設され、大学院大学へと発展・変化を遂げていった経緯は、皆様のご記憶に新しいことと存じます。

誰にとっても何よりも大切な「いのち」と「健康」の回復・維持・増進にかかわる医療職の人材を育てる場では、まずフィジカルな知識・技術が重視されるのは当然のことです。それこそが、医療人が余人をもって代えがたいとされる所以です。ただ、すべての人間には、「こころ」の働きというメンタルな側面が伴っていることも事実であり、フィジカルとメンタルは不即不離の関係にあるといわれます。そのメンタル面をどのように支え、改善に向けて支援するかも、すべての医療人にとって重要な課題であるといえましょう。そして、同時に、個人としての医療人自身が、仕事の重責に疲れ果て、燃え尽きてしまわないように、どのように上手くセルフケアをするか、仲間と連携して支えあうか、何よりも自分なりのしっかりした価値観を確立するかといったことも、決して見落とされてはならない課題であると痛感する歳月でした。

4月1日からは、関西看護医療大学特任教授として、淡路島に通勤するようになりました。毎週一往復、新幹線と高速バスを乗り継ぎ片道約3時間の道のりです。瀬戸大橋から眺める海の景色はとても美しく、夜にはライトアップされた橋と観覧車が幻想的な雰囲気を醸し出し、小旅行の趣があります。13歳になる猫2匹に留守番をさせての遠距離通勤は気がかりなことも多いですが、この22年間に有形無形に学ばせていただいたことを糧として、今しばらく、臨床心理士の立場から看護師教育に微力を尽くしたいと願っております。そして、京都では、従来通り心理臨床の実践および児童虐待防止やいじめによる自殺予防の活動などを、地道に続けて参りたいと存じます。今後とも、何卒よろしくご指導をお願い申し上げます。

末尾ながら、「健康科学」の探求というきわめて重要な使命を担う本専攻の益々のご発展と充実を心よりお祈りして、退職のご挨拶とさせていただきます。（元看護科学コース教授）



退任ご挨拶ー京都大学4年間の思い出ー

中泉 明彦

大阪府立成人病センターから赴任し、4年間京都大学教授として、多くの方に支えられて、種々経験させて頂いたことを深く感謝しています。

赴任して1年目に教えた学生の卒業時に「未熟な授業で申し訳なかった」と話したところ、ある学生から「わかり易かった」との意見をもらい、一所懸命講義をしたことは伝わるのだなと感動しました。前任の教授からの講義資料の申し送りが甚だ乏しく、研究室に配属された初めてのゼミ学生である城戸貴之君の厚意で前年の講義資料を借りて講義の参考にしました。特に免疫学は難解でしたので、悩みながら、少しでも分かりやすくかつ興味を持つことができる講義を目指し、出席をとるのを兼ねて毎週復習のミニテストを行い採点のうえ翌週返却しました。制御性T細胞研究の第一人者である坂口志文教授(現大阪大学免疫学フロンティア研究センター)、佐治博夫HLA研究所長、大阪大学の研修医時代からお世話になっていたWT1ペプチドを用いたガンの免疫療法の第一人者である杉山治夫教授、補体・癌免疫が専門の大阪府立成人病センター研究所井上徳光部長などの錚々たる先生方に講義して頂いたことは、学生にとって素晴らしい知的刺激になったと確信しています。伊藤洋志助教の多大な努力や輸血細胞治療部の万木紀美子主任臨床検査技師をはじめとする京大病院臨床検査部の先生方、元大阪府立成人病センターの笹熊技師の尽力などでなんとか臨床検査総論と免疫学の実習も行うことができました。実習内容の充実を目指して、京大病院臨床検査部との関係改善にも取り組みました。病院実習責任者のときに、4年生が採血時の針で神経を傷つけられて激痛と麻痺が出現したと連絡が入り、京大病院に飛んで行ったことも忘れられません。

卒業研究に関しても、自前の研究室が立ち上がらない状況での担当でしたので、伝手を頼って、学生の希望する研究内容毎に学生と共に、京大病院、再生研、大阪府立成人病センター、HLA研究所の先生方に研究指導をお願いし、受け入れて頂きました。免疫・膠原病内科の三森経世教授、京大病院病理部の羽賀博典教授・片岡竜貴助教・白波瀬浩幸副技師長、再生研の角昭一郎准教授、小児科の西小森隆太准教授、大阪府立成人病センター病理・細胞診断科の竹中明美技師、HLA研究所佐治博夫所長には卒業研究指導で大変お世話になりました。研究者間の相性の悪さや妬みなどにより、このままでは続けられませんかと訴えてきた学生のために、研究室と研究テーマを新たに設定し直したりしたことが、数回ありました。

着任半年後から3年半京大病院消化器内科で外来診察を行いましたが、既知の消化器内科若手医師は皆無でしたので、入院や検査申し込みに関してはその都度、胆膵Gのチーフに相談しながら入院させるなど、かなり気を使いながら行いました。臨床医としての思い出としては、大阪府立成人病センター退任後も京都まで来て下さる患者さんが10人を下らず、その中のお二人は今回の転勤でも東京に通院すると言って下さり、その方々のためにも東京医大八王子医療センターで今秋から診療を開始する予定です。大阪府立成人病センター初診時肝転移を伴う進行膵癌であったにもかかわらず抗がん剤治療で、5年以上有意義な生活を送られ、膵癌卵巣転移の切除術を京大病院で受けられ、大阪の病院で亡くなられた方のご家族と現在も交流があるのは医者冥利に尽きます。

私のライフワークである「膵癌高危険群としての膵嚢胞」に関しての研究は、大阪府立成人病センターの上司が、私の京大教授への応募に反対したために、大阪府立成人病センターとの共同研究を京都大学で続けることができませんでしたが、齋藤邦明教授のご紹介で、天理医療大学臨床検査学科の竹田真由助教と膵液中のGNAS遺伝子変異の検討を開始することができました。細胞診断学分野では日本臨床細胞学会京都府支部長として2年間活動し、高桑徹也教授、伊吹謙太郎准教授、黒住眞史技師の細胞診断トレーニングコースに微力ながら協力し、京都大学の検査技術科学コース卒業生から細胞検査士が誕生したことは喜ばしい限りです。

4年間の研究室ゼミ生・大学院生は18名で、うち9名が病院勤務(1名修士)、5名が大学院在学中、2名が医学科在学中、製薬会社研究所勤務1名(修士)、公務員1名と多彩な進路を進んでいます。

この度、母校である創価高校の系列校である創価大学に、医療系の学部をつくる夢の実現のために、看護学部長として赴任いたしました。現在、全国から集った1期生83名に基礎医学を教えています。創始者から贈られた3指針、生命の尊厳を探究する生涯学びの看護、生きる力を引き出す励ましの心光る看護、共に勝利の人生を開く智慧と慈悲の看護、を目標に奮闘しています。

京都大学の皆さまの益々のご活躍とご発展を心より期待し、ご挨拶といたします。

退職のご挨拶

谷口 初美



小雪が舞う冬景色の京都を去り、梅の香りと春の陽気に漂う母校九州大学に異動したのは今年の2月末でした。本来であれば、昨年の3月末の異動でしたが、高度実践助産学の修士完成年度終了までとの事で、通常と異なる時期の異動となりました。京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻にお世話になりましたのは、約5年間の2008年4月1日から2013年2月28日でした。ハワイ大学看護学部の修士、博士課程を終え卒業後は日本と米国の懸け橋になりたい。そのためには、ホノルルにいた方がと希望していましたが、結局、京都大学に迎えて頂くことになり、5年ぶりに日本で働くことになりました。以前、東京の都心に住んだ経験から、日本で生活するなら大都会ではなく、文化と自然が程よく調和したオアフ島の様なこじんまりとし落ち着いた場所であればと密かに願っていました。なんと古都、京都は私の願いをみごと叶えてくれる街でした。街中に鴨川が走り、その川岸は大自然の宝庫。春は、桜並木。その根元には白い雪やなぎと黄金に輝くレンギョ、遅咲きの真っ赤な椿は、絵に描いたように綺麗で寒い京都の冬を一変してくれます。水辺には魚を求めて来る水鳥のざわめき、岸辺では子供たちの戯れ。週末、大自然と人々のエネルギーに満ち溢れているこの鴨川をサイクリングするのが大好きでした。また、歴史と伝統文化が大切に保存されている都。私が京都にいて世界中の友人達は気軽に京都を訪ねてきてくれました。ハワイからはもちろん、全米、カナダ、イギリス、タイ、オーストラリアから大勢訪ねてくれた事で四季折々の京都の名所、旧跡を訪ねることができ毎回新たな発見と日本の美に感動し、日本人としてこの上なく誇らしく思いました。

京大に入職して、まず取り組んだことは助産教育の大学院化でした。これは我部山先生の長年の希望であり私の希望でもありました。修士課程にするにあたって京大としての高度実践を主張とするカリキュラム編成にシミュレーション教育を取り入れました。先進国の看護教育がシミュレーション教育に力を注ぎ、医療安全の意味からも必須である事を米国で数多く学んだことによります。また、演習・実習委員長、教務教育委員としても取り組ませて頂きました。

研究面に関しては、京大に入職して、ビックリしたのは研究費の低さでした。5年間日本を離れていたこともあり、その間の日本での繋がりがなく、しかも私の年齢からしていろいろな助成金申請には制限があり、「石の上にも3年」という諺がありますが3年間はハワイ大学での研究成果を論文にし、そして費用がかからない研究を地道に行い論文にしていくことしかありませんでした。しかし、3年目にしてやっとすばらしい研究仲間に出会えたこと、皆がその研究を渴望していたことで念願の科研を採択することができ、次々に研究がなされ研究成果を国内外の学術集会に数多く発表した事、そしてその成果を京都大学病院の看護部の指導者研修に活用できたこと、そして国内外のシミュレーション施設の見学や海外からシミュレーション学習を専門とする先生方をお招きしてワークショップを開催したことも京都大学での大きな成果でした。

学術集会に関しては、入職して、直ぐに全国助産師教育協議会の研修会の実行委員長に命じられ京大の百周年記念ホールで開催した事、杉浦ホール開設の時の司会進行から昔培ったアナウンスの賜物が認められいろいろな学術集会等の司会進行係りとしてご指名を受けた事「アナウンサーとしてご指名受けるのは大変喜ばし事ですが、本来であれば学問的なところで。。」とも思っていました、大いに楽しませて頂きみな懐かしい思い出です。退職の時、アナウンサーが我講座からいなくなるのが残念とさえ言われました。何とも複雑な心境でした。

社会的な活動面に関しては、日本助産師会の国際部委員長と日本看護協会の助産師職能委員という役職が与えられ、活動に参加させて頂けたことに感謝しています。ICM（国際助産師連盟）の助産師の質の向上のためのGlobal Standardの基準編成に関わりMDG（ミレニアム開発目標）のためにベトナムとのTwinning Project等でグローバルな視点を培い、日本の現状ではローカルな視点を学び、社会と大学の懸け橋として担う場に置かれた事、また、大学間はオーストラリアのMonash大学との交流に関わられた事等は私にとってよりグローバルな視野を広げるよい機会となりました。

九州大学に着任してからは、一言で言うと「毎日、やり甲斐がありすぎて！」という感じです。教員がとても教育に熱心で厚く、学生と向かい合う姿に日々感動しています。京都大学での多くの学びが九州大学に生かされるよう努力してまいります。

今後ともどうぞご指導よろしくお願い申し上げます。

退職のご挨拶

酒井 浩

平成 23 年 9 月末日をもちまして京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻を退職いたしました。京都大学には 9 年間もの期間、お世話になりました。入職したのは医療技術短期大学部が終了し、医学部保健学科に移行、数年後には大学院も設置するという激動の時代でした。様々な設計図が作成され、開設のための式典が開催されました。私にとって京都大学で過ごした年月は、教育者として、研究者としての基本的な構えを身に着けるための、これからの人生を左右する大切な日々であったと思います。そのような時期に京都大学の様々な先生方からご指導を賜り、基本的な構えを身に着けることができたことに対して、本当に心から感謝しております。特に、リハビリテーション領域の先生方のみならず、人間健康科学専攻の多くの先生方、さらにそれ以外の分野の先生方からもご支援を賜りました。本当にありがとうございました。

新転地である名古屋大学では、京都大学で身に着けたノウハウを活かして、さらなる飛躍ができるように努力してまいりたいと考えております。作業療法を含むリハビリテーションの領域では、地道に臨床的な成果を積み重ねている人材と、臨床からは程遠い基礎的研究において論文業績を積み重ねていく人材に分かれていると感じられます。京都大学では、両者を併せ持った人材がもっとも必要とされていることを学びました。まだまだ、我々の分野では臨床と基礎的研究をつなぐ役割ができる人材は数少ないですが、京都大学で身に着けた様々なノウハウを活かして、臨床と基礎をつなぐ役割を担っていく人材になりたいと考えております。

名古屋は遠いようで近い土地です。人間健康科学分野の発展のために、今後ともいろいろとご尽力を賜りますように、どうかよろしくお願い申し上げます。

退任の挨拶

田中 真琴

3 月 31 日付で京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻看護科学コースを退職いたしましたので、ご挨拶申し上げます。竹ノ内沙弥香先生の育休代替の助手として 4 月 1 日付で着任いたしました。在職中は、公私にわたり一方ならぬご厚情を賜り、心よりお礼申し上げます。看護大学の教員という初めてのことに、戸惑いながらも、大過なく過ごすことができましたのも、ひとえに皆様のご高配あつてのことと心より感謝申し上げます。また、学部生、大学院生の皆様からも、たくさんの学びをいただき感謝しております。

人間健康科学系専攻で過ごした毎日は、私にとって、とても充実感のある贅沢な日々でした。任教授、本田准教授には、多岐にわたりご指導いただき、本当に感謝しております。中でも、成人看護学実習期間中の毎日のミーティングでは、学生さんへの愛情と看護教育への熱意を感じ、濃密な時間だったと思い出されます。学習とは、このように支えられているものなのだと学ばせていただきました。不思議なもので、看護師として学生さんに接するとき、教員として学生さんに接するときでは見え方が違いました。学生さんの素直な感性には驚かされたり、うらやましく思ったり、私自身とても楽しい経験をさせていただきました。両先生方のもとで、教員として未熟な私が実習で伝えられることは何か、と考えたとき、学生さんが「看護やってみようかな」「私にもできるかな」と思える体験を提供するための通訳でありたいと思いました。病院という非日常的な環境での実習は、とても緊張もするでしょうし、カルテや医療スタッフ間で交わされる会話は、慣れるまで理解するのが難しいと私自身も経験しているので、それならできないのではないかと思ったからです。私が看護師を続けてこられたのは、学生時代の実習経験で「看護師やってみよう」と決心したことからです。多くの出会いがあったからです。もちろん、1 週間や 2 週間という短い実習期間で学ぶべき項目は多く、内容のある実習を支えてくださったのは、受け持たせていただいた患者さんの安全とケアを実習病棟のスタッフの方々が保障してくださったおかげだと感謝しております。

また、こちらに着任して、学問としての看護について考える機会をいただきました。看護師として大学病院に勤務していても、今までは関心を持つことができなかつたのですが、すぐ隣で先生方が研究や学びを深めておられることを知り、今後の看護学や看護教育の発展に期待する気持ちが大きくなりました。また、京都大学には、4 つのコースの先生方がいらっしゃることで、今後「人間健康」学が深まっていくことを楽しみにしております。

4 月からは再び京都大学医学部附属病院の看護師として、職務に就いております。積貞棟 7 階に配属されていますので、見かけられた際には声をかけていただくと幸いです。病院と大学との連携が円滑でありますよう、非力ながら応援しております。そして、今後も真摯に看護に向き合っていきたいと考えておりますので、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、先生方のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。



新任のご挨拶

検査技術科学コース 教授 藤井 康友

2013年1月1日付で、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻 医療検査展開学講座教授を拝命いたしましたので、皆様にご挨拶申し上げます。

私は1992年に自治医科大学医学部を卒業いたしました。自治医科大学は医療に恵まれないへき地等における医療の確保向上及び地域住民の福祉の増進を図るために設立された大学であるため、卒後は直ちに故郷である広島県に戻り、大病院から診療所まで9年間（途中1年間、自治医科大学での後期研修がありましたが）地域医療に携わってまいりました。その間、僻地中核病院で比較的広い範囲にわたる様々な症例を経験することや、診療所で校医や往診など地域に深くかかわることで臨床医として研鑽を積む一方、臨床現場での必要性から腹部疾患の超音波診断に興味を持ち、畠 二郎先生（当時公立三次中央病院消化器科医長 現川崎医科大学検査診断学教授）のご指導のもと、当時はまだ困難と考えられていた消化管疾患の超音波診断に関する臨床研究をさせていただきました。その成果をもとに、広島の片田舎からアメリカ消化器病学会週間に出題発表できたこと、診療所で経験した症例を国際雑誌に2編投稿できたことは私にとってささやかな自慢です。

9年間の義務年限が終了した後、超音波の基礎的な研究をしたいと考え、超音波画像の定量化に関する研究をされていた自治医科大学臨床検査医学講座 伊東紘一教授（当時、現名誉教授 常陸大宮済生会病院院長）の門を叩きました。超音波に関する研究では、機器メーカーや工学系研究者の方々との共同研究を行って参りました。ここでは工学系と臨床系お互いのニーズを探る橋渡しの役割の重要性を学びました。超音波診断のみならず、超音波エネルギーの治療応用を目指した、超音波の生体や微生物に及ぼす影響に関する研究も平行して行っております。自治医科大学附属病院では超音波医学会認定専門医・指導医として腹部、心臓、血管をはじめとして頭の先からつま先まで、あらゆる臓器の超音波診断および若手医師・技師の超音波教育に従事し、臨床検査医学会認定専門医として検査部の運営に携わってまいりました。学生教育では医学生や近隣の検査技師学生の超音波診断学や検査データから病態を推察するトレーニングである reversed CPCなどを担当してきました。また、学外活動では、自治医科大学臨床検査医学講座 谷口信行教授のご推薦にて、2005年より日本超音波医学会機関雑誌「Journal of Medical Ultrasonics」の編集委員（総合領域担当および幹事）の一員に加えていただき現在に至っております。本雑誌は2008年にインパクトファクターの取得に成功しており、次なる目標であるMEDLINE掲載を目指して活動中です。

現職着任に際しまして、私のこれまでの臨床・教育・研究の経験を生かし、まずは学生教育の充実を図りたいと考えております。私の専門とする超音波診断学は、超音波の医師離れなど昨今の医療情勢を鑑みますと、今後ますます検査技師の活躍が期待される分野であることは間違いありません。非侵襲的で簡便な超音波は、検査のみならず看護やリハビリの分野においても、その臨床および研究において有用なツールとして期待されるモダリティーです。学生たちには超音波診断学の重要性を、興味を持って理解してもらえるよう講義や実習で指導してまいりたいと考えています。そして、この領域のリーダー的存在が誕生するよう微力ながら全力を尽くす所存です。また、超音波診断学のみならず、これまでの比較的広い範囲での臨床経験を生かして、検査データから何を読み取ることが重要か、あるいは臨床上のピットフォールはどこにあるのか、といった教科書にない講義の展開をすすめてまいりたいと思います。今後ともご指導、ご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

就任のご挨拶

看護科学コース 講師 内海 桃絵

4月より看護科学コース基礎看護学講座生活環境看護学分野の講師に着任いたしましたので、ご挨拶申し上げます。

私は、聖路加看護大学卒業後、聖路加国際病院で看護師として外科病棟と画像診断部に勤務しました。その間、転倒転落事故の分析や医療関連感染対策に関わる活動をする機会に恵まれ、そのことが、日本看護協会の感染管理認定

看護師教育課程の専任教員になるきっかけとなりました。その後、大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻に進学し、医療施設関連感染に関する研究を行いました。そして平成22年4月に助教として京大に着任いたしました。大学の教員は初めての経験で戸惑うことも多かったですが、先生方、事務職員の皆様方のご支援により勤めることができました。心から感謝申し上げます。

この3年間、基礎看護学講座にて、主に2回生を対象に、治療・検査・処置など侵襲が加わる治療援助技術についての講義、学内演習と看護基礎教育課程における初めての臨地実習を担当してきました。学内演習では、対象患者や場を設定し、手技だけに集中するのではなく、患者への声かけや観察ポイントを忘れないように工夫しています。手技の習得に関しては、オープンラボを設置し、各自のペースで繰り返し学習できる機会を提供しています。看護の魅力と楽しさを学生に伝えることができるよう、また、実際の看護の状況や問題点を理解してもらうために、京大病院の看護婦さんにもご協力いただき、講義、演習を組み立ててきました。

医療の高度化、人口の高齢化、人々の健康意識の高まりにより、看護師が担うべき役割、必要な技術、期待される能力は広がっています。看護師は、医師、薬剤師、検査技師、理学・作業療法士など多くの医療専門職、さらには事務職など医療を支える多くの人々と協働し、対象となる人々の健康問題に働きかけることが求められています。看護師が背景の異なる専門職と協働する上で必要なのは、看護の専門性を理解し、看護師としてのものの見方や考え方ができること、正確な看護技術を習得していることだと考えています。看護の対象に寄り添い、その人が抱える健康問題の本質を捉え、計画し、行動できる学生を育てていきたいと思っています。

今年度からは、2回生に加えて1回生の授業も担当しています。基礎看護学は、看護教育の導入部であり、学生が看護に初めて触れる機会となります。導入部分でつまづくことがないように、学生の状況を見極め、看護の魅力をいかに伝えるかを日々考え、学生に向き合っていこうと思います。

研究に関しては、在宅医療・介護における療養者、家族および医療介護に携わる多職種間の情報共有についての研究に参加しています。これは、療養者および家族からも情報発信可能なシステムであり、実証実験においては、患者および家族からの記録が最も多く、日々の体調の変化などについて、主に訪問看護師とやり取りを行っていました。様々な職種、立場の人との分野横断的なプロジェクトですが、そこに看護師としての知恵を導入してよりよいシステムを作り上げられたらと思っています。また今後、高齢者だけではなく、手術後や一時帰宅など、より重症度の高い患者を対象にしたシステムの構築も可能であると考えています。その際には、感染症の早期発見、対処などにも役立つシステムを構築したいと考えています。

また、看護教育に関する臨床と大学との共同研究にも参加しています。近年、看護基礎教育修了時点での能力と臨床で求められる能力とのギャップが生じています。しかし、資格のない看護学生が重症な患者を受持ち、侵襲的な処置を実施することはできないことから技術・能力の習得には限界があります。そこで、安全で効果的な技能習得と状況判断能力の向上の方法としてシミュレーション教育を導入し、臨床への移行をスムーズにすることを目指しています。

専門職業人の育成を目的とする人間健康科学科においては、教育と研究は車の両輪だと思います。研究プロジェクトをさらに進め、この成果を教育にフィードバックし、よりよい授業を行えればと考えています。

今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくごお願い申し上げます。

就任のご挨拶

リハビリテーション科学コース 助教 松島 佳苗

平成25年4月1日付で、京都大学大学院医学研究科 人間健康科学系専攻の助教に着任いたしました松島佳苗（まつしま かなえ）と申します。本紙をお借りして、着任のご挨拶をさせていただきます。

私は、大阪府立大学の短期大学部を卒業後、一般病院での臨床経験を経て、青年海外協力隊員として発展途上国（パラオ共和国）における障害児支援に関わる機会に恵まれました。これまでの臨床の現場は、勉強嫌いな私に学び続けることの大切さと、沢山の興味と疑問を与えてくれました。そして、途上国での子ども達との出会いから、京都大学

大学院医学研究科 人間健康科学系専攻への進学を決意し、帰国後は発達障害領域における作業療法の臨床研究に取り組んできました。臨床・教育・研究共に経験も少なく、自分が出来ること・伝えられることは本当にわずかですが、臨床に活かせる研究を目指しながら、対象児・者と共に歩んでいける作業療法士の育成に貢献できればと思っております。まだまだ、自分自身も日々勉強する身として、丁寧に1つ1つの種を蒔きながら、学生と共に育っていける存在となることが現時点での目標です。



教育という業務に携わる中で伝えることの難しさを感じ、慣れない大学の業務に苦戦することもあります。周囲の先生方のお力添えを頂き、楽しい日々を過ごさせて頂いております。もし、右往左往している姿をどこかで見かけることがありましたら、暖かい目で見守ってやっていただければと思います。今後とも、ご指導とご鞭撻を賜りますよう宜しくお願い致します。

着任のご挨拶

検査技術科学コース 浪田 健



平成 25 年 5 月 1 日付けで、京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻検査技術科学コース情報理工医療学講座の特定助教として着任いたしました浪田健と申します。よろしくお願いたします。

私は、室蘭工業大学工学部情報工学科卒業後、北海道大学の大学院工学研究科修士課程、同大学の大学院情報科学研究科博士後期課程に進学し、生体工学を学びました。博士後期課程修了後から約 4 年間、同大学で博士研究員として研究を続けて参りました。また、博士後期課程在学中から北海道大学の学生に対してだけでなく、北海道工業大学において、主として臨床工学技士をめざす学生に対し、非常勤教員として電子回路やデジタル信号処理および心電計製作の指導に当たって参りました。

このように工学系のバックグラウンドを持つ私ですが、学部の卒業研究からは終始一貫して人々に役立つもの、特に人に優しい低侵襲、非侵襲の医療診断装置の開発をめざして研究を行って参りました。X線CT、MRI等を用いて一度生体内部の三次元情報を取得すると、様々な断面からの断層像を生成することができます。また、胃のように内部に空洞を持つ器官や管状の器官では、三次元像を二次元に展開することにより病理標本のようなものを仮想的に生成することもできます。学部時代にはこのような三次元情報の活用方法について研究を行っていました。

修士課程進学後はより小型、簡便な装置の開発をめざし、光を用いた生体計測に関する研究に従事して参りました。光を用いた生体計測では、組織、臓器ごとの光学特性（光の散乱や吸収の程度）の違いを利用した生体内の形態イメージングができるだけでなく、複数の波長を用いて生体内の特定成分の有無や変化を捉えることにより、生体機能もイメージングすることができます。しかし、光は生体の強い散乱、吸収特性により、なかなか深部の情報を正確に捕らえることができません。そこで、北海道大学在籍中はパルス光源を用いて受光強度の時間変化を計測することにより、深部のわずかな情報を捕らえる方法の考案を行ってきました。また、特に光散乱の影響を抑制することにより、深部の明瞭な像が得られるな計測手法についても検討を行ってきました。

しかし、それでも光を用いた計測には深達度の限界があり、対象部位は限定的なものになります。そこで本学では、生体の形態・機能情報が同時に得られる利点を持つ光に、生体内での減衰が少なく深達度大きい超音波を組み合わせることにより、適用可能な範囲が広く、実用性の向上が期待できる光音響イメージングの研究をしていきたいと考えています。

このたび縁があり人間健康科学系専攻の特定教員として赴任することとなりました。プログラム「先端融合領域イノベーション創出拠点形成」の課題「高次生体イメージング先端テクノハブ」の特定教員で研究が中心になるかと思いますが、微力ながら全力で研究だけではなく学生指導に携わっていく所存です。至らない点が多々あるかと思いますが、ご指導、ご鞭撻のほどよろしく願いたします。

第 25 回健康科学市民公開講座 開催報告

学術委員長 リハビリテーション科学コース 教授 坪山 直生

平成 24 年 11 月 17 日土曜日午後、「膝の痛みと対策」というテーマで第 25 回健康科学市民公開講座を開催しました。膝に痛みのある人は多数おられます。特にその原因の代表である変形性膝関節症の罹患者は全国で推定 2400 万人ともいわれ、健康で有意義な生活のために克服すべき課題の一つです。そこで、膝の痛みの原因やその対処法について情報を得て頂く目的で、この講座を企画致しました。

事前に約 150 名の参加申込を頂戴していましたが、当日の悪天候の影響があり、実際には 90 名のご参加を得ました。椎名専攻長の開会挨拶に引き続き、1 時間の講演を 2 講行いました。

第 1 講では膝関節専門医である下鴨病院副院長小林雅彦先生から「膝の痛みの診断と治療」というテーマで、スポーツ傷害から変形性膝関節症に至る代表的疾患の症状、診断、治療まで、わかりやすく説明して頂きました。

第 2 講では当専攻の黒木裕士教授から「変形性膝関節症と運動」のテーマで、具体的な運動療法の方法とその効果について、データを交えて紹介がありました。

総合討論として質疑応答の時間を設けました。質問を休憩時間に記入して提出してもらい、できるだけ一般性の高い質問を選んで回答するという方法をとりましたが、予定を少し延長し、全体の 6～70% の質問に回答できたと思います。日常生活や受診にあたっての留意点、自宅での運動の内容など、講演の中身を補追する総合討論になりました。

アンケートではテーマについて「大変良かった」47、「良かった」23、「ふつう」1 という集計結果でした。また個別のコメントとして、「説明が患者目線でわかりやすかった」「ポイントがはっきりしていた」「実際のデータにもとづいての結果を話されていて実感出来た」など好意的なご意見を頂戴しました。

雨の中を多数参加下さった市民の皆様に深謝致します。



2012 年度オープンキャンパス

2012 年度オープンキャンパスは 2012 年 8 月 10 日（金）に前年度と同様、A 時間帯、B 時間帯の 2 回にわたって行われました（次ページ表 1）。全体説明会では、坪山学科長の挨拶のあと、各専攻（看護、検査、理学、作業）の紹介が各コース担当教員からされました。その後、各専攻に分かれて、実習等の体験、研究室との施設見学、学生個別相談が行われ、アンケート調査からも、いずれも好評でした。参加者は表 2 に示しますが、A 時間帯は女子 131 名、男子 35 名の計 166 名、B 時間帯は女子 82 名、男子 43 名の計 125 名が参加しました。専攻別では看護 99 名、検査 92 名、理学 70 名、作業 25 名（未定 5 名）でした。また、都道府県別では京都 57 名、大阪 26 名を始めとして東北や九州からも参加者がありました。事故や病人はありませんでした。2013 年度は 8 月 7 日（水）に同様のスケジュールで行われる予定で、今後の京都大学人間健康に多くのやる気のある学生のリクルートのために、重要なイベントであると思われます。

表1 オープンキャンパス2012スケジュール

A時間帯 (12:30~14:30)		B時間帯 (15:00~17:00)	
12:00	全体説明会受付開始 ※全体説明会会場：第9講義室	14:30	全体説明会受付開始 ※全体説明会会場：第9講義室
12:30	開会 学科長あいさつ	15:00	開会 学科長あいさつ
12:35	各専攻の紹介 (看護・検査・理学・作業)	15:05	各専攻の紹介 (看護・検査・理学・作業)
13:00	各専攻説明会 ○看護学専攻 (第5講義室) ○検査技術科学専攻 (第8講義室) ○理学療法学専攻 (第7講義室) ○作業療法学専攻 (第6講義室) ★実習等の体験 研究室等の施設見学 学生個別相談など	15:30	各専攻説明会 ○看護学専攻 (第5講義室) ○検査技術科学専攻 (第8講義室) ○理学療法学専攻 (第7講義室) ○作業療法学専攻 (第6講義室) ★実習等の体験 研究室等の施設見学 学生個別相談など
14:30	終了	17:00	終了

表2 オープンキャンパス2012参加者状況

●参加者数

	参加者数		高1		高2		高3		既卒・その他	
	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子
A時間帯	131	35	52	16	53	10	15	7	11	2
B時間帯	82	43	45	23	30	14	6	3	1	3
計	213	78	97	39	83	24	21	10	12	5
	291		136		107		31		17	

※既卒・その他=既卒女1、中学3年生女子6・男子1、中学2年生女子1、専門学校生女子1、不明女子2・男子1 (A時間帯)

※既卒・その他=既卒男子1、中学3年生女子1、不明男子2 (B時間帯)

●専攻別

	看護		検査		理学		作業		未定	
	女子	男子								
A時間帯	54	3	43	16	19	15	14	0	1	1
計	57		59		34		14		2	
	看護		検査		理学		作業		未定	
	女子	男子								
B時間帯	38	4	20	13	16	20	6	5	2	1
計	42		33		36		11		3	

●参加者の都道府県別人数【※A・B時間帯合わせた人数】

北海道	0	青森	0	秋田	0	岩手	1	宮城	0	山形	0
福島	1	茨城	8	千葉	1	栃木	0	群馬	2	埼玉	0
東京	5	神奈川	1	山梨	1	新潟	1	長野	5	静岡	6
愛知	4	岐阜	2	三重	4	富山	5	石川	6	福井	25
滋賀	21	京都	57	大阪	26	兵庫	19	奈良	16	和歌山	19
徳島	15	香川	2	愛媛	3	高知	8	岡山	4	広島	14
鳥取	1	島根	0	山口	1	福岡	2	大分	0	佐賀	1
長崎	2	熊本	0	宮崎	1	鹿児島	1	沖縄	0		

人間健康科学系専攻から博士が5名誕生しました

平成25年3月25日、みやこめっせにおいて、沢田敏男元総長をはじめ、各理事・副学長、各部局長等の出席のもとに、大学院学位授与式が行われました。人間健康科学系専攻からは、下記5名に博士（人間健康科学）が授与されました。

博士授与者と論文題目

有岡 祐子

論文題目：Activation-induced cytidine deaminase alters the subcellular localization of Tet family proteins
(Activation-induced cytidine deaminase による Tet ファミリータンパク質の細胞内局在制御)

荻田 美穂子

論文題目：Indications and practice for tube feeding in Japanese geriatricians: Implications of multidisciplinary team approach (日本人老年科医師における経管栄養療法に対する適応判断と実践；多職種アプローチの影響)

立松 典篤

論文題目：Impact of esophagectomy on physical fitness in patients with esophageal cancer
(食道切除術が食道癌患者の身体機能に及ぼす影響)

西中 瑤子

論文題目：Singlet oxygen is essential for neutrophil extracellular trap formation.
(一重項酸素は好中球細胞外トラップ形成に必須である)

富永 渉

論文題目：Activation of the primary motor cortex during observation of a mirror reflection of a hand
(手の鏡像観察中の一次運動野活性化に関する研究)

京都大学での出会いに感謝

有岡 祐子

2004年に医学部保健学科検査技術科学専攻に入学して以来、大学院修士課程・博士後期課程を合わせた計9年間を京都大学で過ごしました。大学に入ったばかりの頃はまさか自分が研究者の道を歩むとは夢にも思っていませんでした。本学科を選んだのも、漠然と医療の仕事をしたい、あるいは単に白衣を着る仕事に憧れていただけという単純な動機からです。転機は学部2回生で行なった分子細胞生物学の実習だったと思います。残念ながら基礎研究は表立ってはその利用価値が見出せないことが多いです。けれども基礎研究があるからこそ現在の医療がある、それが私の興味をそそりました。さらに加速をつけたのが、研究の世界は憧れの白衣を着られる仕事だということでした。

今回本原稿を依頼され、改めてこれまでの生活を振り返ってみると、つくづく私は「人」に恵まれてきたなと思います。単純な動機で飛び込んだ研究の世界は当然厳しいもので、ひとりでは決して何もできませんでした。現在に至るまでに多くの出会いがありましたが、特に4回生のゼミ配属での斉藤先生との出会いが私を大きく変えたと思っています。臨床検査技師としてはもちろんのこと、基礎研究者としての道を教えてくださいました。博士後期課程の3年間は京都大学IPS細胞研究所へ外向（山田研究室）というかたちで在籍をさせていただき、最先端の研究の世界に触れることもできました。つらいこともありましたが、そこでも私を支えてくれたのがやはり人との出会いでした。

現在私は岐阜大学医学系研究科の助教として勤務しており、アカデミックの世界へと進んでいます。ここでは実際臨床で働いている人々と接することが多くなりました。まだ着任して数カ月ですが、臨床現場が実際どういった基礎研究を望んでいるのかのヒントをたくさん教えてくれます。ここでの出会いもまた、おそらく私を成長させてくれるでしょう。

臨床検査技師として病院に勤務ではなく、アカデミックな研究の世界へと進んだ私ですが、この選択をできたのも京都大学が与えてくれた選択肢の多さゆえだと思います。苦しいこともあります、「研究」



は飽きっぽい私が続けられている数少ないことです。多くの人々に支えられながらここまでこれたことに感謝し、今後は基礎研究の世界から、微力ながらも臨床検査学の発展へ貢献したいと思っています。

博士号を取得して

荻田美穂子

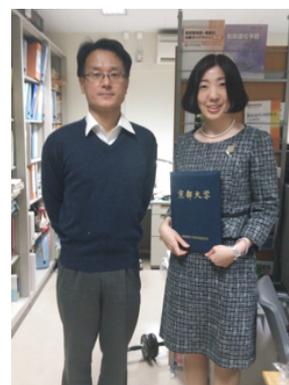
私は、京都大学医学部附属病院で4年間看護師として勤務後、他大学院の修士課程を修了し、3年間の助教経験を経て、博士課程に進学しました。博士課程在学中の3年間は苦しいこともありましたが、再び学生として研究に専念できることが楽しく、大変充実した時間でした。

博士課程では、高齢者の生活の質という視点で、さまざまな研究に関わる機会をいただきました。その中で、将来のテーマも見えてきたように思います。博士課程では附属病院でのフィールドワーク以外に、附属病院の転倒委員会に参加させていただいたり、臨床看護師にも共同研究者に入ってもらいディスカッションすることで、「どう患者さんに役に立つのか・・・」といつも臨床的視点を持ちながら研究に取り組むことができたことに感謝しています。また、同級生には理学療法士や作業療法士がおり、さまざまな専門職との意見交換は、高齢者の包括的ケアを考える上で大変有意義なものでした。人間健康科学系専攻では多く研究仲間を横断的に作る機会に恵まれ、今研究を行う上での大きな力となっています。

それから、初めて国際学会の口演で発表する機会をいただきました。これまで、国内での口演は何度か行っていましたが、英語での発表は初めてでした。発表原稿を作成し、発音やアクセントを矯正するために英会話レッスンにも通い練習をしました。苦しくも他国の研究者に自身の研究成果を伝えられることの面白さもありました。国際学会での発表や国際誌への投稿の中では、意見をいただくこともあり、国際的視点が広がり、英語で研究成果を伝えていくことの重要性を再認識しました。

現在は、看護系大学の講師として教育および研究活動に従事しています。今後も好きな研究を続けられることを嬉しく感じています。修士時代、研究の道を志した時の気持ちを忘れず、患者さんのためになる研究に精進していきたいと思っています。

最後になりましたが、博士課程にてご指導をいただきました荒井秀典教授をはじめ、これまでの研究でご支援をいただきました多くの皆様に厚く感謝申し上げます。



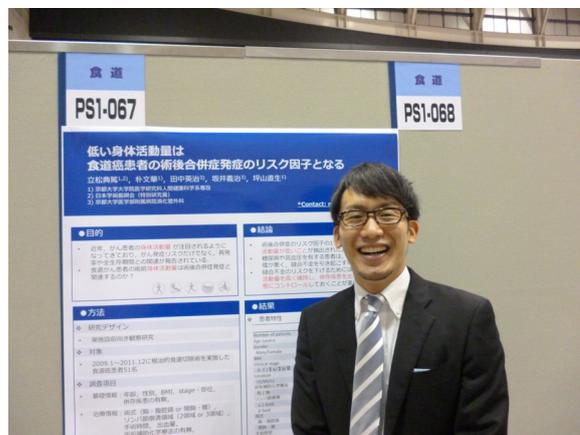
2013年3月 学位授与式を終えて
(指導教授とともに)

博士号を取得して

立松 典篤

平成 25 年 3 月に人間健康科学系専攻博士後期課程を修了致しました、立松典篤（たてまつのりあつ）と申します。この度、本紙面をお借り致しましてご挨拶申し上げます。

私は平成 19 年 4 月に修士課程に入学し、坪山直生先生のご指導のもと、研究活動に従事して参りました。私の研究テーマが「がんのリハビリテーション」という当時は新しい分野のものでしたので、研究方法やフィールドの確保などには大変苦勞致しました。しかしながら、坪山先生をはじめ大学院の諸先輩方、そして京都大学医学部附属病院の先生方のご指導のお陰で、無事に博士号を取得することが出来ました。この場をお借りしまして、厚く御礼を申し上げたいと思います。



大学院に入学した当初は修士 2 年間で研究法について学び、一般病院に就職して臨床現場で研究をしていこうと考えていました。しかしながら、研究法は非常に奥深く、2 年間では学びきれないと思うのと同時に、自分自身の興味もどんどんと広がっていきました。博士課程への進学は決して簡単な決断ではありませんでしたが、今となってはとても良い決断だったと思っています。博士課程の 3 年間で更に学びを深めたことで、自分自身で研究をデザインし、実行し、まとめて発表するという、研究者としての基礎を身につけることが出来たと確信しています。そして、まだまだ未熟者ではありますが、ようやく研究者としてのスタートラインに立つことが出来ました。

この 4 月より、私は「神戸低侵襲がん医療センター」というがんの専門病院に就職致しました。大学院での 5 年間の経験を活かしながら、がん患者さんが必要としているリハビリテーションを明らかにし、さらには必要な患者さんへと届けて行けるように日々精進していきたいと思っています。京都大学博士後期課程修了者の名に恥じぬよう、1 人の理学療法士として患者さんと真摯に向き合っていきたいと思っています。今後ともご指導ご支援の程、どうぞよろしくお願い致します。

博士号を取得して

西中 瑠子

振り返ること 9 年 (!) 前、「病院で働く検査技師になりたい」と思い、私は京都大学医学部保健学科に 1 期生として入学しました。そんな私が、卒業研究を通して研究の面白さに魅入られて大学院の修士課程に進み、平成 25 年の 3 月に博士課程を修了し、無事学位を取得するに至りました。

修士課程から博士過程に進む際は、就職するべきか悩みましたが、結局、学部時代の病院実習以外では一度も臨床の現場に出ることなく、ここまで来ました。当時行っていた研究の面白さを捨てきれなかった結果ですが、今となってはこれまでの自分の選択に後悔はありません。

博士課程に入ってから最も大きな変化としては、研究の主導権を自分でとるようになったことでした。(とは言っても常に周りの先生方に相談し、助けられていましたが) さらに、これまでとは違い自分のテーマとは全く異なるテーマで先輩の指導にあたったことで、修士課程時代より格段に忙しく、充実した日々を送ることが出来ました。複数のテーマに関わる中で、いろんな方々の研究姿勢や様々な実験手法に触れ、自分はこれからどうするのか、どうしたいのか、ということをおぼろげなく考える機会が多かったように思います。

また、研究室で先輩が増えるにつれ、様々な行事も行われるようになり、楽しい時間を過ごすことが出来ました。

そして、最後に学位審査を乗り越えたことで、ある種の自信が付き、自分に不足しているところも浮かび上がり、少しずつながら今後の目標が明確になったことが非常に良かったと思っています。

そんな中、私は自分が従来の「医学」ではなく、「人間健康科学」という新たなカテゴリーの学位を取得するに当たって、その意味をよく考えていました。そして私なりに考えた結果、人間健康科学とは、各種疾患の治療はもちろんのことながら、それだけに留まらず、疾患の予防、さらには健康状態の維持、増進という幅広い視点から、人間の「健康」を科学的に考える、ということではなかろうか、というところに落ち着きました。（これに対する反論、批判等は多々あると思いますし、ぜひご意見を頂きたいところです）

ともあれ、今後はこの「人間健康科学」という幅広い視点から少しでも社会に貢献出来れば、と思っています。

4月からはiPS細胞研究所でポスドクとして研究に従事しています。これまでの研究分野とはかなり違うところで一から新しいことを始め、新鮮な気持ちで毎日を送っています。社会貢献に至るには、まだまだ力不足ですが、引き続き目の前に与えられたことに全力で取り組んでいこうと思っています。

最後になりましたが、修士課程から現在まで通して、たくさんのごことに触れる機会を与えて下さった指導教員の足立先生、そして非常に面白く、今後も続けて行きたいと思える「活性酸素」というテーマを与えて下さった荒井先生、の両先生方には感謝してもしきれません。また、これまでお世話になったたくさんの方々にもこの場を借りて御礼申し上げます。



大学院の5年をふり返って

富永 渉

この度、博士後期課程を無事終えることができ、これも偏に周囲で私の研究を支えて下さった先生方ならびに同僚のおかげと感謝するばかりです。

私は大学院修士課程・博士後期課程の5年間、脳磁図（MEG）を用いてミラーセラピーのメカニズムについての研究を行ってきました。これまでにMEGに関わったことは全く無かったため、研究を始めた当初はMEGの操作・解析あるいは実験の設定など、分からないことばかりで苦難の連続でした。しかし、MEGを用いた研究はこれまでに経験したことのないものばかりでしたので、非常に興味深く好奇心が刺激される毎日でした。直接研究に関わることはありませんが、MEGのシステムを維持するために行っている液体ヘリウムの補充作業ですら、これまでヘリウムといえば「ダックボイス」のスプレー缶くらいしか知らなかった私にとっては楽しい作業でありました。また、作業を行いながら助教の松林潤先生と研究に関する意見交換ができたことも、研究を進める上で非常に貴重な時間だったと今では思い出されます。研究そのものは楽しい反面、ゼミでの発表は棘の道でした。プレゼンテーションに余計なスライドやアニメーションをふんだんに盛り込んだことで、教授の三谷章先生や松林先生から厳しい批判を受け、重苦しくなった部屋の空気を笑いに変えることもできず、気持ちが沈むということも数えきれないくらいありました。しかし研究のプロセスを一つ一つ経験していくなかで、実験の組み立て方、解析の方法、統計学的検定の方法、見聞きする側が理解しやすいスライドやポスターの作り方など、非常に多くのことを詳細かつ丁寧に学ばせて頂いたように思います。今後は、これら大学院での研究を通しての経験や、先生方から学んだ多くのことを、続く後輩の指導や教育に活かすことができるよう、なお一層努力を重ねて参りたいと思います。

最後に改めて、これまでの研究を支えて下さった三谷先生と松林先生、医学研究科附属脳機能総合研究センターの先生方、様々な面で実験を助けてくれた研究室の同僚に対し、紙面をお借りして御礼を申し上げます。



人間健康科学系専攻・人間健康科学科
平成 25 年度入学試験結果 及び 平成 24 年度修了・卒業者数

平成 25 年度 医学部人間健康科学科入学試験結果

専攻・日程		募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護学専攻	前期	70	171	74	70
検査技術科学専攻	前期	37	78	40	40
理学療法学専攻	前期	18	28	19	19
作業療法学専攻	前期	18	68	24	23
合 計		143	345	157	152

平成 25 年度 医学研究科人間健康科学系専攻（修士課程）
入学試験結果

コース	募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護科学コース 【高度実践助産学系（内数）】	28 【10】	38[8] 【19[0]】	24[5] 【10[0]】	23[5] 【9[0]】
検査技術科学コース	13	31[0]	26[0]	25[0]
リハビリテーション科学コース （理学療法学講座）	4	14[1]	13[1]	13[1]
リハビリテーション科学コース （作業療法学講座）	4	6[2]	4[1]	4[1]
合 計	49	89[11]	67[7]	65[7]

[]の数、社会人特別選抜（内数）

平成 25 年度 医学研究科人間健康科学系専攻（博士後期課程）
入学試験結果

コース	募集人員	志願者数	合格者数	入学者数
看護科学コース	15	21	13	12
検査技術科学コース		4	4	4
リハビリテーション科学コース （理学療法学講座）		8	8	7
リハビリテーション科学コース （作業療法学講座）		0	0	0
合 計	15	33	25	23

平成 24 年度 医学部人間健康科学科卒業生数

専 攻	卒業生数
看護学専攻	60
検査技術科学専攻	36
理学療法学専攻	23
作業療法学専攻	15
合 計	134

平成 24 年度 医学研究科人間健康科学系専攻（修士課程）修了者数

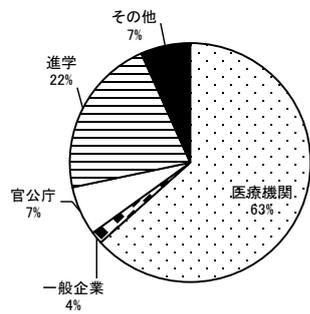
コ ー ス	修了者数
看護科学コース 【高度実践助産学系（内数）】	13 【1】
検査技術科学コース	15
リハビリテーション科学コース （理学療法学講座）	12
リハビリテーション科学コース （作業療法学講座）	4
合 計	44

平成 24 年度 医学研究科人間健康科学系専攻（博士後期課程）修了者数

コ ー ス	修了者数
看護科学コース	1
検査技術科学コース	2
リハビリテーション科学コース （理学療法学講座）	1
リハビリテーション科学コース （作業療法学講座）	1
合 計	5

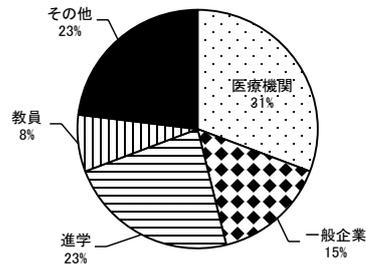
平成24年度(平成25年3月)卒業・修了生の進路調査結果

■学部

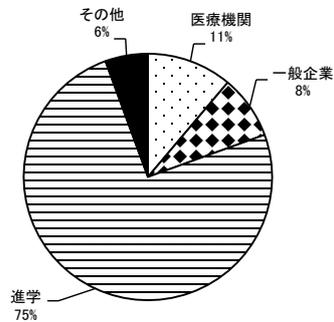


看護学専攻

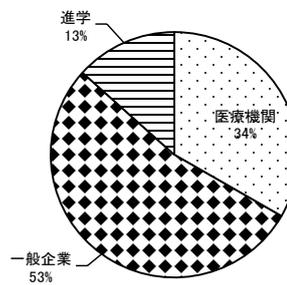
■大学院(修士)



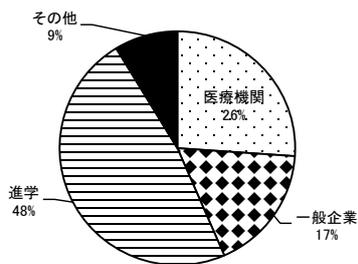
看護科学コース



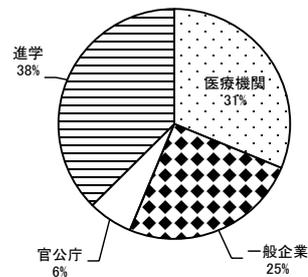
検査技術科学専攻



検査技術科学コース

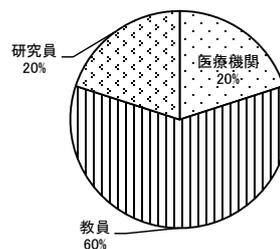
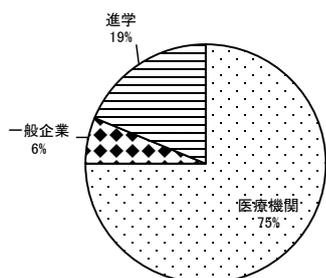


理学療法学専攻



リハビリテーション科学コース

■大学院(博士:コース全体)



人 事 異 動

発令年月日	職 名	氏 名	所 属	異 動 事 由
平成				
24.7.30	助 手	堀田 佐知子	看護科学コース	採用(教務補佐員より)
24.9.30	助 教	酒井 浩	リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)	辞職
24.9.30	助 手	堀田 佐知子	看護科学コース	任期満了(教務補佐員へ)
24.10.1	准教授	竹松 弘	検査技術科学コース	配置換(生命科学研究科准教授より)
25.1.1	教 授	藤井 康友	検査技術科学コース	採用(自治医科大学医学部講師より)
25.2.28	准教授	谷口 初美	看護科学コース	辞職
25.3.31	教 授	菅 佐和子	看護科学コース	定年退職
25.3.31	教 授	中泉 明彦	検査技術科学コース	辞職
25.3.31	助 手	田中 真琴	看護科学コース	任期満了(京大病院看護師へ)
25.3.31	主 事	数井 保博	事務部	定年退職
25.3.31	総務掛長	新堂 利博	事務部	転出(桂地区(工学研究科)総務課掛長へ)
25.3.31	教務掛主任	瀬戸 美穂	事務部	転出(農学研究科等主任(第一教務掛)へ)
25.4.1	講 師	内海 桃絵	看護科学コース	昇任(助教より)
25.4.1	助 教	松島 佳苗	リハビリテーション科学コース (作業療法学講座)	採用(京都大学博士課程より)
25.4.1	主 事	東 敏樹	事務部	転入(医学研究科専門員(教務・学生支援室、兼大学院教務掛長)より)
25.4.1	総務掛主任	中西 静治	事務部	転入(エネルギー科学研究科主任(総務掛)より)
25.4.1	教務掛主任	大槻 温子	事務部	転入(工学研究科教務課主任(教務掛(地球工学科)より)

日 誌 (H24.4～H25.3)

24.4.2	安寧の都市ユニット運営協議会	8.10	オープンキャンパス
4.4	「安寧の都市ユニット」開講式		教務・教育委員会
4.5	医系懇談会	8.24	3年次編入学試験
	病院協議会	8.28	大学院修士課程入学試験
	修士課程1回生ガイダンス		
	博士後期課程1回生ガイダンス	9.6	病院協議会
4.6	学部入学式		夏祭り
	大学院入学式		教務・教育委員会
	学部新入生ガイダンス	9.12	執行部会議
4.11	執行部会議		全学教育シンポジウム
4.12	医学部・医学研究科将来計画検討委員会	9.13	入試委員会
	医学研究科会議・医学教授会		臨時教授会
4.17	拡大執行部会議		医学部教授会
4.19	教員会議		医学研究科会議・医学教授会
	教授会	9.14	大学院修士課程入学試験合格発表
	教務・教育委員会		3年次編入学試験合格発表
4.25	執行部会議		京大関係病院長協議会定例総会
4.26	医学研究科専攻長会議	9.18	拡大執行部会議
		9.19	医学部遺骨返還式
5.8	臨床実習指導者会議	9.20	教員会議
5.9	執行部会議		教授会
	病院協議会	9.26	執行部会議
5.10	医学部・医学研究科将来計画検討委員会		安寧の都市ユニット運営協議会
	医学研究科会議・医学教授会	9.26	執行部会議
5.15	拡大執行部会議		安寧の都市ユニット運営協議会
	安寧の都市ユニット運営協議会	9.27	医学研究科専攻長会議
5.17	教員会議		第15回国立大学理学療法士・作業療法士
	教授会		教育施設協議会総会
	教務・教育委員会		
5.19	大学院説明会[リハビリテーション科学コース]	10.4	医系懇談会
5.23	執行部会議		病院協議会
5.24	医学研究科専攻長会議		教務・教育委員会
5.25	第49回臨床検査技師教育協議会	10.11	医学研究科会議・医学教授会
		10.12	執行部会議
6.2	大学院説明会[看護科学コース]		拡大執行部会議
6.3	第6回国立大学保健医療学系代表者協議会	10.18	教員会議
	看護学分科会		教授会
6.4	第7回国立大学保健医療学系代表者協議会	10.19	医学部解剖体祭
6.7	病院協議会	10.24	執行部会議
	教務・教育委員会	10.25	医学研究科専攻長会議
6.9	大学院説明会[検査技術科学コース]		
6.13	執行部会議	11.1	病院協議会
6.14	医学研究科会議・医学教授会		教務・教育委員会
	施設管理委員会	11.6	大学院博士後期課程入学試験
6.18	創立記念日	11.7	執行部会議
6.19	拡大執行部会議	11.8	医学研究科会議・医学教授会
6.21	教員会議	11.9	安寧の都市ユニット運営協議会
	教授会		拡大執行部会議
6.22	平成24年度全国国立大学法人助産師教育	11.10	京都大学ホームカミングデイ
	専任教員会議	11.15	入試委員会
6.27	執行部会議		教員会議
6.28	医学研究科専攻長会議		教授会
7.5	医系懇談会	11.17	第25回健康科学市民公開講座
	病院協議会	11.21	執行部会議
	教務・教育委員会		11月祭前夜祭
7.10	安寧の都市ユニット運営協議会	11.22	医学研究科専攻長会議
			11月祭(～25日)
7.11	執行部会議	11.30	大学院博士後期課程入学試験合格発表
7.12	医学研究科会議・医学教授会		
7.17	拡大執行部会議		
7.19	教員会議		
	教授会		
7.25	執行部会議		
7.26	医学研究科専攻長会議		

日 誌

12.5	臨床実習指導者会議	3.7	病院協議会
12.6	病院協議会	3.8	教務・教育委員会
	教務・教育委員会	3.9	入試委員会
12.12	執行部会議		臨時教授会
12.13	リーディング大学院教授会		医学部教授会
	医学研究科会議・医学教授会	3.10	学部個別(2次)学力検査合格発表
12.14	拡大執行部会議	3.12	安寧の都市ユニット運営協議会
12.20	教員会議	3.13	安寧の都市ユニット修了式
	教授会		執行部会議
12.26	執行部会議	3.14	医学研究科専攻長会議
12.27	医学研究科専攻長会議		医学研究科会議・医学教授会
25.1.4	人間健康科学系専攻新年挨拶会	3.19	拡大執行部会議
	執行部会議	3.21	リーディング大学院教授会
1.7	病院協議会		教員会議
1.10	医学研究科会議・医学教授会		教授会
	教務・教育委員会	3.25	大学院学位授与式
1.16	入試委員会		博士後期課程・修士課程修了を祝う会
	臨床実習Ⅲ(評価実習)指導者会議	3.26	学部卒業式
	拡大執行部会議	3.27	執行部会議
1.17	リーディング教授会	3.28	医学研究科専攻長会議
	教員会議		医学研究科会議・医学教授会
	教授会		執行部会議
1.19	大学入試センター試験(～20日)		
1.23	執行部会議		
	医系懇談会		
	五〇会総会(新年会)		
1.24	医学研究科専攻長会議		
	医学研究科会議・医学教授会		
1.25	安寧の都市ユニット運営協議会		
2.7	病院協議会		
2.13	執行部会議		
2.14	医学研究科会議・医学教授会		
	教務・教育委員会		
2.15	拡大執行部会議		
2.20	安寧の都市ユニット運営協議会		
2.21	リーディング大学院教授会		
	教員会議		
	教授会		
2.22	過半数代表者選出選挙		
2.25	学部個別(2次)学力検査(～26日)		
2.27	執行部会議		
2.28	医学研究科専攻長会議		
	医学研究科会議・医学教授会		

あとがき

広報委員長が交代したことによりまして、例年より広報の発行が遅れましたこと、お詫び申し上げます。広報委員会では、学科ホームページの医学部ホームページへの統合に伴う全面改訂を進めております。分かりにくい点などありましたら、

遠慮なくご意見頂ければと思います。

(山田重人)

〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町 53
<http://www.med.kyoto-u.ac.jp/>